

大学スポーツにおけるアメリカンフットボール組織の模索と展開 —日本の部活動を事例とした各主体の関わりとその変遷からの考察—

竹之内 駿海

アメリカンフットボールは戦前から日本に持ち込まれ、以後戦争による中断期間を経ながらも、大学の部活動をその中心として発展を遂げてきた。また、アメリカンフットボールの特徴として、選手のみならずコーチやスタッフなど、役割を持った主体の数が他競技に比べても非常に多く、ベンチワークの重要性が極めて高い。そうした中で、特に国立大学では、試合だけでなく部の運営においても、学生やOBの自助努力により、特徴的な運営が行われている。

しかしながら、実際にアメリカンフットボール部に所属していた筆者の経験から、日本においてマイナースポーツに位置付けられるアメリカンフットボールに関するこれらの実情は、フットボールに馴染みのない外部の人々には捉えられておらず、競技関係者の共通認識に留まっていると感じた。また、先行研究においても、国内のアメリカンフットボールに関する研究の数は乏しく、とりわけ組織の内実に迫るような質的研究は見受けられない。一方、日本の大学スポーツ全般に関する先行研究に関しても、大学の特性によって体育会所属者の活動実態に差異があることが明らかにされているものの、これらはアンケートを用いた量的な研究が中心であり、その背後にある具体的な要因については明らかになっていないという課題が見られる。

このような背景の元に、本研究では、大学スポーツにおけるアメリカンフットボール組織の内実及びそこに至るまでの模索と変遷について考察し、さらに日本の大学スポーツ全体の発展への可能性についても展望することを目的とした。まず、日米の大学スポーツの比較および国内のアメリカンフットボール組織による取り組みを分析し、日本の大学アメリカンフットボール組織の特徴と課題について整理した上で、筆者による大阪大学アメリカンフットボール部への参与観察と現役部員3名へのインタビュー調査を行った。また、組織の変遷を考察するために、部のOB3名にライフストーリーに関するインタビュー調査を行った。

これらの調査結果から、観戦者の存在が学生の資金面の支援に直接つながっておらず、学生に大きな負担が強いられているなどの構造上の課題を多く抱えている一方で、部員と支援者の距離の近さにより生まれる相互作用など、日本の大学フットボール独自の特徴が存在することが明らかとなった。また、これらの特徴はOB・OGを中心とする支援者から援助を受けながら、学生の自助努力により運営されるその他の日本の大学スポーツ組織にも当てはまるものであり、大学フットボールおよび大学スポーツにおいても、学生と支援者の相互作用を重要なものとして捉えることが鍵となり、同時に学生が主体となって支援者に働きかけることが、さらなる展開へと繋がることが示唆された。(環境行動学)